

ジェイン・ジェイコブズ ～都市の生態学

『発展する地域 衰退する地域』（中村達也訳 ちくま学芸文庫 2012年）を読む

2017年4月23日

ルネサンス研究所関西研究会 椿 邦彦

(1) スタグフレーション、深刻な経済的衰退へと陥る状態 (第1章 愚者の楽園)

[以下、斜体はテキストからの引用。()はテキストのページ数。テキスト中の(※)、下線は報告者。]

① マクロ経済学の実験とその破産

a. マクロ経済＝国民経済、国際経済

マクロ経済 — 大規模な集計量を扱う経済学 — は、国民経済及び国際経済を理解し改善する理論と実践を扱う学問分野である。それは、いま混乱状況にある。その零落の原因は、これまで無批判に議論を展開してきたという点にある。われわれは、素粒子物理学や宇宙開発の実験を非常に金のかかるものだと考えているし、事実その通りである。しかしその費用は、もろもろの銀行、産業界、政府、また世界銀行や国際通貨基金や国連のような国際組織が、マクロ経済学のテストのために注ぎ込んだ途方もない巨額の資金に比べると何ほどのものでもない。そして、これほど破壊、不愉快な驚き、幻滅、混乱をもたらし、その破壊の跡がはたして修復できるかどうかという深刻な問題を引き起こした実験はない。そして、もし修復できるとしても、もとようにはならないことはたしかである。(p16)

b. デイマンドサイド経済 — マーシャル・プラン（第2次大戦後の欧州復興計画）とその後のこれに類する開発援助計画の効果はいかなるものだったか

こういった根拠のない約束の結末はひどいものであった。期待が大いに高まったあとで、相変わらずの停滞と貧困のままにとどまった地域住民の怒りと幻滅。援助資金を出した納税者の側での、他人を援助するすることの価値についての — さらに悪いことには、援助を受け取った人びとの価値についての — 冷笑的な物の見方。「発展」によって採算がとれるという幻想のもとで、後進諸国が抱え込んだ返済不能な借金。(p19)

② スタグフレーション＝経済衰退の徴候

末期状態の病気であるのと、すでに死んでいるのとではちがうように、台頭し始めたばかりのスタグフレーションと、長期にわたる恒常的とも見えるようなスタグフレーションとはちがう。本当に瀕死の淵にある経済は、すでに物価高と高失業率とが定着したきわめて深刻な状態になっているため、そこにいたる過程はすっかり終わっている。物価と失業が相たずさえて上昇過程にある経済の場合は、まだ瀕死とまではいかないが、現状を逆転させないかぎりそうなることは避けがたい。スタグフレーションは経済的停滞の当然の結果にほかならないと思ふ。それは、後進性や低生産性が停滞の当然の結果であるのと同じである。私の考えがまちがっていないとすれば、それまで拡大・発展していた経済にスタグフレーションが台頭したこと

には、ただならぬ徴候が見てとれる。それは、単にインフレーションを抑制するという問題、あるいは失業を選択することによってインフレーションを抑制するという問題ではない。スタグフレーションは、それ自体として問題のある状態、つまり、深刻な経済的衰退へと陥る状態なのである。(p47)

(2) 国民経済かそれとも都市経済か (第2章 現実に立ちもどって)

① マクロ経済学の仮定

それは、経済活動がいかに機能するか、またその構造がどうなっているかを理解するためには、国民経済の概念が役に立つという考え方であり、また、マクロ経済学的分析のための基本データを提供するのは国民経済であって、他のものではない、という考え方である。この仮定は、初期の重要主義経済学者以来およそ400年の歴史をもっている。……初期の重商主義経済学者は、貿易と財貨をめぐるヨーロッパ列強の対立関係という問題に心を奪われていた。富とは何か、それはいかにして生ずるか、いかにして保持され失われるかを理解する鍵は、眼前にくり広げられる諸国民間の対立関係にある、と彼らは考えた。その理論によれば、富は金(ゴールド)から成り、金は、一国が財貨を集める過程で、買う以上の財を売ることによって蓄積される(「重商主義」というよび名はここからきている)。(p50)

② 国家は経済活動における基本的な存在か?

国家は、政治的、軍事的存在であり、諸国のブロックもまたそうである。しかし、だからといって、それらが経済活動における基本的な存在であるとか、経済構造の謎、すなわち富の隆盛と衰退の理由を追究するのにとりわけ役立つということにはならないのである。事実、一国の政府や諸国のブロックが、その命令通りに経済活動を動かそうとして果たせなかったことは、本質的なところで、そこにある種の不適切さがあることを示している。……現実の経済世界を、政治的で人為的なものとしてではなく、ありのままに見るならば、大部分の国はまったく異なる諸経済の集合ないし寄せ集めであること、同一国内にも豊かな地域と貧しい地域があることがいやおうなしに見えてくる。

さらにまた、ありとあらゆる種類の経済がある中で、都市は、地理的遠隔地の経済をも含めて他地域の経済のあり方を左右する力をもつ点で、ユニークな存在であることも見えてくる。(p54)

※ バルドーの例→「受動経済」(=自力で経済的变化を創造せず遠方の都市で生じた力に対応するだけの経済)

③ 国民経済と都市経済とを区別することがなぜ重要なのか

両者の区別は、経済活動を再形成しようとする実践的な試みにおいて、決定的に重要である。たとえば、この区別をしそこなったために、後進諸国のやたらと高きついた多くの経済的大失敗が生じたのである。輸入置換(import-replacing)あるいは輸入代替(import-substitution)というきわめて重要な機能は、現実には、何よりも都市の機能であって、「国民経済」には達成できないということを見逃した結果、これらの大失敗が生じたのである。私は本書で、かつて輸入していた財を、自力でつくる財で置換することによって、都市がいかに成長し経済的に多様化するかについて、大いに論ずるつもりである。(p60)

④ 都市経済が発展するための3要素

- イノベーション (innovation 技術革新)
- 輸入置換 (import-replacing)
- インプロヴィゼーション (improvisation)

経済活動はイノベーションによって発展する。つまり、輸入置換によって拡大する。この二つの主要な経済過程は、密接な関連をもっており、ともに都市経済の関数である。さらに、輸入置換がうまくいく場合には、生産計画、原材料、生産方法の適応を伴うことが多く、このことは、とりわけ生産財とサービスのイノベーション、および臨機応変の改良を意味する「インプロヴィゼーション」(improvisation)を必要とする。(p66)

※ 東京の自転車産業の例

東京で自転車産業が始められたとき、最初は輸入自転車の部品をはずして修理する仕事だった。続いて、修理作業に必要ないくつかの部品の製造が始まり、次いでより多くの部品の製造が、そして最後には東京製自転車全体の組み立てが始まった。そして、東京が国内の都市に自転車を輸出し始めるやいなや、それら顧客都市のいくつかでは、外国からではなく、東京から輸入した自転車を置換するという同じような過程が生じた。(p64)

⑤ 国民経済学は何を見落とし、何を見誤ったか

a. 国内の都市間交易による輸入置換の重要性

輸入置換あるいは輸入代替を外国からの輸入品しか含まない過程と考え、経済活動にとって国内からの輸入品の置換が同じくらい、あるいはそれ以上に重要だということに気づけなかった。その都市自身の生産で国内輸入品を置換していない、あるいはできない都市の経済は、外国からの輸入品を置換する段になると、まったく弱体であり、悪くすると手も足も出ない(p72)

b. 都市の輸入置換過程を無視した工場移転(誘致)

開発問題の専門家が、…… 輸入置換を都市そのものの過程として …… 考えないで、輸入置換を国の過程として考えたために、彼らは、すでに完成している工場(もちろん外国からの輸入品を置換生産する)を、任意に、どこにでも …… 設置できると主張した …… あまりにも現実からかけ離れているために、このような計画は、国の繁栄を促進するよりもむしろ国を衰退させる可能性があり、事実衰退させてきたのである。

⑥ 輸入置換都市が生み出す5つの大きな力

1. 市場
2. 仕事
3. 移植工場
4. 技術
5. 資本

(3) 発展する地域 ～都市地域とは何か (第3章 都市地域)

① 都市地域の定義

都市によっては、郊外を越えてすぐに始まる後背地で、農業的、工業的、商業的な仕事場が渾然一体になっているところがある。このような都市地域は、都市それ自体を別とすれば、あ

らゆるタイプの経済の中で最も豊かで、最も人口密度が高く、最も陰影に富んだユニークな地域である。(p75)

② 都市地域が生れる条件 ～都市の輸入置換の力学

盛んに輸出活動を行い、観光客を引きつけ、あるいはまた文化的、政治的、宗教的中心地となっている都市が、必ずしも都市地域を生むとはかぎらないのは明らかである。輸出業務や行政管理以上の何かが必要なのである。その何かとは、都市が広範な輸入品をくり返し豊かに置換する力をもっていることである。重要な都市地域を生み出す都市は、その力をもっているか、あるいは過去においてもっていた。まさに都市の輸入置換の力学が、おのずから都市地域の形成をもたらすのである。(p78)

③ ロナルド・P・ドーア『シノハタ — ある日本の村の肖像』

シノハタは実在の都市地域に呑み込まれた実在の村落である。そこは 49 世帯と彼らの土地から成り、東京の北西およそ 100 マイルのところ（直線距離ではなく、鉄道と道路によってである）にあるが、そこは何年か前に、拡大する東京の都市地域が一気に飛び越えた凹凸の激しい山地のさらになたである。集落は谷間の奥にあって、その向こう側にはもう一つの山が控えているようなところである。

遠い昔、おそらくシノハタは最低生存の農業と手工業によって生計を立てていた地域であったと思われ、都市との交易関係はなかった。…… 時折、江戸から商人が訪れていた。…… 主要な換金作物は、米と繭であった。…… また、商人にわずかな材木、季節ものの少しばかりのきのこ、自家製の炭を売った。この3つの産物を手に入れるためと自家用の薪を手に入れるために、村人たちは植林された山をこまめに、すみからすみまで歩きまわった。(p80)

a. 【都市の市場】

新しい輸入品に対する東京の市場の拡大は、都市地域では、作物の多様化を実現する可能性を切り拓いた。1950 年代後半以降、シノハタの人々は、昔は東京からの需要がなかったものによって結構な収入を得ることができるようになった。桃、ぶどう、トマト、都市の庭園向けの植木、しいたけ、…… 多様化は、村の食生活にも影響を与えた。シノハタの人々は、現在、なす、栗、じゃがいも、大根、にんじん、いちご、かぼちゃ、レタス、キャベツなどをつくっているが、それらは換金作物として重要だからというのではなく、自家用であったり、隣近所の農家ならどこでもやっているように親しい者同士の物々交換用としてである。馬は、いまでは不要になったので、代わりに肉牛を飼い始める世帯も出てきた。…… あらたな換金作物と並んで、米の産出高は飛躍的に増大した。(p82)

b. 【都市の仕事】

東京における仕事の増大は、シノハタにも牽引力を及ぼし始めていた。

1956 年以前には、東京に移住したものはほとんどいなかった。…… しかし、56 年以降は、東京の仕事生活にひかれる若者が非常に多くなり、75 年までに、子供全員が家を出たのが 14 世帯あり、他の世帯の多くでは子供のうち何人かが出ていった。(p83)

c. 【技術】

農業をすてる人がいる一方で、農産物に対する需要が増えたために、何か手を打つ必要があった。…… 労働の節約のための設備がまず必要であった。…… それは、歴史的に見て、農村の労働節約の設備が必ずといっていいほどまず都市地域で開発され、しかるのちにはじめて他の地域へと拡張されていったのはなぜかを説明するものであった。シノハタでは、野良仕事においても屋内作業においても、労働節約の設備が急速に普及するにつれ、土地に対する個人々の生産性も急上昇した。たとえば稲作に必要な時間は、1975年までには、55年の水準の半分で済むようになっていたが、これは、その前の50年間の変化よりもはるかに急激な変化である。(p83)

労働節約型設備のおかげで、シノハタの農民の中には、農業を専業とせず、シノハタやその近辺での賃仕事と農業を両立させる者が出てきた。しかし、普通は、家族の何人かが農業にたずさわり、他の何人かは賃金を稼いで、農繁期には手伝うということが多かった。家族の中では、年寄り連中が主として土地に責任をもち、若い者が仕事に出かけるということが多かった。1975年には、1人暮らしの年配の女性7人が他人の力を借りずに農業をやっていたが、これは、村に労働節約型の設備が広く行きわたるまでは、男女を問わず不可能なことだった。(p84)

d. 【移植工場】

こうした変化と同時に、東京の工場が移植されてきた (*transplanted*)。…… この企業は、工場のきれいな自然環境を広告の謳い文句にし、村からわずかばかり離れたバード・サンクチュアリに工場をつくることでそのイメージを高めた。シノハタに対する「工場」の主な経済効果は、それが提供する仕事によるものではなく、むしろ、それまで村の共有地であった工場用地とサンクチュアリ用地に対して工場が支払ったかなりの額の代金によるものであった。売却による収益は全世界帯に分配され、その多くは家の修繕や台所の近代化や新築に使われたが、それは、こんなことでもなければ、すぐに手をつける余裕がなかったことであった。たまたま地の利のよい私有地をもっていたために、他の人より収入の多かった村人は、村に浄水場を贈った。…… 「工場」が雇用面でほとんど当てにされなかったのは、いずれにせよその労働力が少ないことと、間もなく多くの新しい企業がきたことによる。(p85)

しかし、こういった都市の仕事の移植工場がきたというだけでは、この村の新しい非農業的な暮らしぶりをよく伝えることにはならない。というのは、シノハタはいまでは、谷間や、もっと先の他地域と経済的に複雑に入り組んだ関係 — それは、旧来の経済にはなじみのないものであっても、都市地域に組み込まれた地域としては典型的なものだった — をもっているからである。たとえば、ある家では、妻は近くの部落に移植された下着工場で働き、夫は、染色工場に勤めている。またある家では、夫は「工場」の下請会社に勤め、妻は保険の外交員をし、息子の一人は東京空港の大ホテルで料理見習人になった。……

はじめ近隣の村のニジマス養殖場で働いていたシノハタの男性は、妻が「男なみの賃金」を稼げる建築の仕事を得たときに退職した。この収入で、妻は夫を扶養することができ、夫のほうは、農業を多少やる以外は、自然研究に精を出した。こういったことに没頭するなどということは、以前だったら、大変な貧困を覚悟しなくてはできなかったであろう。(p86)

e. 【資本】

こういった変化が生じている中で、都市の5番目の大きな力である資本も、変化をもたらしつつあった。町の政治課題は、おもに、道路、橋、学校、灌漑用水路、「および、これらのものに対する中央政府の補助金獲得策」である、とドーアは言う。(p88)

シノハタが恩恵を受けた特定交付金のなかで最も重要なのは、1959年の台風と水害によるものだった。……というのは、そのおかげで、シノハタの力だけでは、おそらく実現できなかったような改良を行なうことができたからである。(p89～90)

④ 都市地域の経済的諸特徴

a. 都市地域の経済的転換はなぜ生じたか

シノハタの経済的転換は、村の人々の勤勉、知力、才覚という特性によるものだとするのにも一理あるように見える。しかし、転換後のシノハタの人たち自身が、先祖のほうがもっと勤勉に働いていたことを認めているのである。……変わったのは、人間としての彼らの特性ではなく、都市の市場、仕事、技術、移植工場、資本のすべてが同時に、大規模に、相互にほどよくシノハタに影響を及ぼすようになったという事実なのである。村の転換は、これ以外の観点からは説明できない。(p90)

⑤ 都市地域の経済的合理性

都市地域は、都市それ自体と同様、驚くほど小規模な地理的範囲に、様々な経済活動を詰め込んでいる。たとえば、コペンハーゲンとその都市地域は、デンマークの領土のなかではほんの小部分を占めるにすぎないが、そこを抜き出してみると、デンマークの全経済の主要部分、デンマークの経済的多様性のほとんどすべてと、人口の半分以上が含まれているのである。地域の人口が特に集中しているのは、都市地域のためであることがわかる。たとえば、並外れて人口密度が高いイギリス南東部は、ロンドンとその郊外の人口によるだけでなく、ロンドンの都市地域によるものである。

……都市地域の経済は、都市そのものを別とすれば、他のどんな経済類型と比較してもはるかに複雑であるが、都市地域を理論的に理解することは、大方の人にとって難しいことではない。というのは、都市地域は、多くの欠陥や問題を抱えてはいるものの、それらは、本質的には道理にかなっているからである。つまり、都市地域は、他の人々に対してだけでなく、地域の住民や生産者にも豊かで多様な生産を行なうのである。あとで見るように、都市地域は、唯一妥当な地域経済の形態なのである。(p93)

⑥ 都市地域が衰退するとき

都市地域の中核をなす都市が停滞し衰退する場合、その原因は、もはやそこでは輸入置換にまつわるあの重要なエピソードが経験されなくなったということである。停滞した都市経済は、しだいに先細りになり、時代に取り残される。そこでは、旧来の輸出の損失をあらたな輸出の仕事で補うことができず、したがってその都市地域は、他の諸都市、都市のない諸地域にたいする市場としてはしだいに貧弱になる。都市および都市地域の現実問題が未解決のまま山積する。怠慢がはびこる。経済的に衰退しつつある都市地域では、以前の、主として農村的な状態にたちもどることはない。その地域では、混合し複雑に入り組んだ経済という特徴は長期にわたって保持されるが、地域の経済はしだいに先細りになり、後進性も増す。地域が織りなす構

造に、いわばほころびが広がるのである。都市の仕事を求めてその地域を離れる若者は、地域内の都市を素通りして、仕事さえあれば遠方の都市に行こうとする。都市の仕事の移植工場は、長期間にわたってその都市地域に流出しつづけるが、その原因は、それらの都市が新しい企業の過密化によって押し出されるからではない。むしろ、それらは未解決の都市問題から逃げているのであり、あとはただ空虚が残されるだけである。最後にはその源泉も枯渇し、移植工場の流出はやむ。

都市地域は、輸入置換都市の特徴の多くを具えているが、それ自体は都市ではない。善きにつけ悪しきにつけ、それは中核都市がつくりだしたものであり、それ以上のものではないのである。(p94)

(4) ある地域はなぜ失敗したのか（あるいは成功したのか）

すでに見たように、都市の力は、後背地ではそのすべてが相伴って発現し、それぞれの力はおおむね妥当な均衡を保っている。しかし、これらの力のつねとして、それらが遠方の諸地域に及ぶときには均衡はやぶれる。あたかもそれは、後背地を結合させていた完璧な経済的紐帯が、都市地域の境界ではほつれてなくなるようなものである。市場、仕事、技術、移植工場、資本、これら様々なより糸が網目から離れて、てんでんばらばらの方向に分かれてゆく。こうして都市は、遠方の諸地域で、発育不全な奇怪な経済を形成する。(p96)

① 供給地域 (第4章)

そのようなグロテスクな経済の中で、最も重要なのが供給地域である。供給地域は、遠方の諸都市の市場の影響を受けていびつに形成される。供給地域は貧しいことが多く、その経済的無能力さが貧困のせいにもされることも多いが、しかし、豊かな供給地域の場合でも、貧しい供給地域と同様に発育不全で無能力なのである。これらの地域の欠陥は、貧困問題よりも根が深いのである。実際、この欠陥によって、遅かれ早かれ、貧困をもたらさずにはおかないのである。

たとえば、ウルグアイは数世代にわたって非常に豊かな供給地域であった。ウルグアイは、畜産業で大きな成功をおさめ、肉、羊毛、皮革を、遠方の、主としてヨーロッパの諸都市や都市地域の市場に供給してきた。しかし、肉、羊毛、皮革以外はほとんど生産しなかった。にもかかわらず、ウルグアイは何一つ不自由しなかった。ウルグアイで生産しないものは何でも輸入すればよかったからである (p96)

② 労働者に見捨てられる地域 (第5章)

すでに述べたように、地域経済を転換させる唯一の力は、善かれ悪しかれ、輸入置換都市に端を発する5つの大きな力、すなわち都市の市場、仕事、技術、移植工場、資本である。そしてこれらの力のうちの 하나가、自前の輸入置換都市をもたない遠隔地に不均等な形で及んだとき、その結果は悲惨で、アンバランスなものになる。人々に見すてられた地域の場合、この不均衡な力とは、もちろん、遠方の都市の仕事による牽引力である。この力は、ある地域の人口を流出させることはできても、地域の経済を転換させることは何一つできない。(p119)

③ 技術と住民排除 (第6章)

都市地域では、農業労働者の生産性上昇は、労働者が他の仕事につくために土地を出ていったことを反映している。都市から遠い地域や自前の輸入置換都市をもたない地域では、事情は異なる。そこでは、生産性の上昇が、既存のもの代わる新しい生活をもたらすのではなく、むしろ、生産性の上昇によって過剰人口が生じたり人々の窮状が放置されることもある。(127)

実際には、生産的な都市の仕事への道がひらかれていないかぎり、農村の貧困を克服する方法はないのである。スコットランドの住民排除の時代にもそうであったが、現在でも同様である。豊かなアメリカの場合もそうであったし、世界銀行の貧しい貸付相手国の場合も同様である。農村の産出高と農業労働者の生産性を上昇させるには多くの技術があり、その中には費用のかからない技術、適正技術、中規模および小規模の技術も含まれる。しかし、もっとも必要とされるにもかかわらず欠けているものは、適合性のある、活気に満ちた輸入置換都市である。これらの都市が存在しなければ、遠方の都市から恣意的にもたらされる技術は祝福されるべきものであるどころか、弊害をもたらすものとなり、そうした技術によって生み出される経済的な富とは、一部は幻想、ときにはまったくの幻想でさえある。(p147)

④ 移植工業地域 (第7章)

a. 「工業誘致」は有効か

供給地域、見すてられた地域、住民が排除された地域に関して、また、停滞し衰退した都市の問題に関してよく下される診断は、「工業が足りない」ということである。そしてそれに対して通常ほどこされる処方箋は、「工業を誘致する」ことである。(p148)

都市地域に見られるような自立的で分化する経済を再現しようとする工業誘致政策は、自前の工業をもたないまま遠くからそれを呼び寄せるだけのアイルランド、イタリア南部、カナダの太平洋側諸州その他多くの地域に失望をもたらした。シチリアでは、幻滅した関係者は、主としてイタリア政府が巨額の融資を行なったこの島の移植工業を「砂上の楼閣」とよんだ。ギリシャには、非常に多くの多国籍企業が工場、製油所、化学工場を移植させたため、空気と水の汚染という不名誉な事実が残った。にもかかわらず、常時ギリシャの若者の約3分の1が北ヨーロッパで仕事についているか、そこで仕事を探していたし、国に残った人の中では、相変わらず失業ないし不完全雇用が驚くべき高率を示し、ギリシャの地方の村々は、痛ましいまでに貧困に打ちのめされたままである。移植工場から受け取る賃金は、ギリシャの農民が遠方の都市の市場へ送り出す換金作物と同様に、遠方の都市からの輸入品を買うのにあてられる。こうした賃金は歓迎されている。というのも、アテネも他のギリシャの都市も、広範な輸入品を地元の生産によって置換しないからである。もしギリシャの都市が輸入を置換していたなら、自前で工業や移植工場を生み出して、はるか遠方の諸都市から出てきた相対的に自給的な工業に依存したりしなかつたらう。

移植された工業を基礎として自立的な経済を建設することはできないだろうか。経験的に見て、それは難しそうである。と言うのも、供給地域は、歴史的には世界の活力ある諸都市が発生し興隆してきた場所であるが、工場が移植された地域の場合はそうではなかったからである。(p157 ~ 158)

b. 台湾はなぜ成功したか

(台北への軽工業投資の成功)

台湾の、比類のない驚くべき実績の背後にあるもろもろの出来事は、台湾政府が「農民への土地解放」とよばれる計画を導入した 1956 年にまでさかのぼる。その目的自体は取り立てて言うほどのものではなく、農地を半封建的な地主の所有から、土地を耕作する小作農民の所有へと移すことだった。政府は、土地を収用された地主への支払に際して付帯条件をつけたが、それが農村の地主を都市の資本家に転化させることになったのである。その付帯条件とは、支払の一部を軽工業へ投資するという規定であった。投資の種類と投資先は、台湾内部でさえあれば、旧地主の選択にまかせられた。投資家の大部分が選んだ場所は、首都であり最大の都市でもある台北だった。台北には人口が最も集中していたし、生産財やサービスも最も集中していたから (はじめはそれほど多くはなかったが)、これは正しい選択だった。(p158)

(インプロヴィゼーションが機能する条件)

政府は、土地を収用された地主に全額を支払わないで、それと等しいファンドを軽工業設立のために使うことも、もちろんできたはずである。しかし、仮にそうしたとしても、それらが現実につくられた軽工業ほどインプロヴィゼーションを得意とし、柔軟かつ多様だったかどうかはわからない。また、経験を積んだ従業員がより多くの適所をそこに見出し自分たちの企業により多くの顧客と供給事業者と投資家を見出す過程で、分化した無数の企業を生み出したが、政府による工業の場合にそうしたことが生じたかどうかはわからない。

もしかすると、台湾で起こったことは、他のところでは不可能かもしれない。もしかすると、台湾でうまく作用した都市の資本のインプロヴィゼーションは、他のところではうまく機能しないかもしれない。しかし、経済的なインプロヴィゼーションの成功とはそもそもそういう者なのであり、インプロヴィゼーションがうまくいくとしたら、原因はそれが抽象的また理論的に「正しい」からではなく、時と場所と手近にある資源と機会とが現実にあっているからなのである。インプロヴィゼーションがうまくいけば、経済活動は驚くべき発展を遂げるのである。(p161)

(成功の基本原則)

にもかかわらず、台湾の経験の背後にある基本原則は、なんらかの方法でほかのところでも利用できると思う。その原則は次のように要約できる。「自分たちの安い労働力が外国人に利用されるくらいなら、われわれ自身がそれを利用すべきである」。また、「外国からの移植工場が、われわれにも利用できる経験や技術を与えてくれるなら、われわれはそれを、自分たちの意に沿うように利用することができる」。たとえば、もしプエルトリコ政府が、最初に労働集約的移植工場の誘致に成功したのち、今度はプエルトリコ人自身の手中に資本をおさめたとしたら、彼らは何を達成できただろうか。実際はそうならなかったから、プエルトリコは、おそらくあと 1 世代の間は、台北や高雄からの移植を求めることであろう。(p162)

c. 移植工場の需給関係

世界には、停滞していて不活発で自前の工業を生み出さないにもかかわらず、工業を欲している地域が非常に多いため、工業の移植に対する需要は供給をはるかに上まわっている。言い換えれば、移植工場を大量に生み出す都市と都市地域が相対的に少なすぎるために、需要に応ずることができないのである。そして、都市が生み出す移植工場のうち、大部分は遠くへは移

れない。いつの場合にも、自前の輸入置換都市をもたない遠方の地域へ飛躍できるのは、生み出された諸工業のうちのごく一部分だけである。そしてそれらの中でも、労働集約型よりも資本集約型の工業が多いことを考え合わせるなら、失業の解決策として移植工場を熱望している地域の大部分にとっては、それは虚しい期待に終わらざるをえないのである。(p163)

⑤ 都市のない地域に向けられた資本 (第8章)

世界有数の水力発電プロジェクトであるガーナのポルタ・ダムは、いくつかの工場に電力を供給することになっていた。しかし、アメリカのアルミ精錬工場を除けば — そもそもこの工場の参加が約束されていたから、ダム建設がスタートしたのである — その電力を利用するにいたった工場はほとんどなかった。電力はきわめて安く、このアルミ会社は、現在、工業用電力の世界平均価格の10分の1で電力を利用しているにもかかわらずそうなのである。ダムはまた、灌漑によって換金作物の栽培を促進することになっていたが、この計画もとうてい不可能であることがわかり、計画からはずされた。8万人の住民は、ダムと貯水池に場所をあけわたすために伝統的な村の最低生存の経済から追いだされて、他の土地へ移されたものの、その土壌がとても悪いために、半数以上の人々が食べていくこともできず、そこから出ていった。そしてその大部分は、土地をもたない被救済民になったとみられている。

大事業に融資される資金力に心を奪われて、このような投資が発展そのものであると考える人は多いようだ。ダムをつくれれば発展が得られるというわけである。しかし、実際は、ダムをつくったところで、都市の市場と移植工業がなければ、何にもならないのである。ポルタ・ダムのような経済的なむだは、さほど珍しいことではない。「その気になればまったく役立たずのダムを、世界中で40ばかり数えあげることができる」と、国連の食糧農業機関のある関係者は言っている。もちろん、だからといって、すべてのダムが役に立たないということではない。需要に応じた電力を供給し、市場に出せる作物の灌漑に役立ち、洪水を防ぐ役割を果たすダムも多い。それなしでは暮らし向きも悪くなるだろう。しかし、ポルタ・ダムのようなむだな投資が意味しているのは、都市が放出する大きな力の5番目のものである資本は、それが都市地域を越えて不均衡な形で外に伸びていく場合には、他の四つの力と同様、まったく悲惨な状態を生む可能性があるということである。

(5) 発展の条件 (第10章 なぜ後進都市は互いを必要とし合うのか)

① 後進国の急激な工業化が失敗する理由

発展とは、自前でやる (Do it yourself) 過程である。いかなる経済も、自前でやるか、さもなければ発展しないのかどちらかである。今日高度に発展している経済は、かつては後進的だったその状況を乗り越えたのである。それらの経済の経験を蓄積することによって、問題を実際にどう処理するかが示されるのである。歴史的には、二つの主要パターンないし主題、すなわち、後進諸都市の相互依存および経済的インプロビゼーションが見られる。ジャーとピョートル大帝そして彼らの顧問たちは、先進経済と単純な双方向交易によって何とか発展を実現しようとし、また、すでに発展し終えた方式と製品によりかかって手っとり早く自生的な試行錯誤やインプロヴィゼーションの手間をはぶこうとした。しかし、それはまったく的はずれであった。

前章で私は、新しい諸都市が交流し繁栄するためには、既存の諸都市が新しい諸都市の製品

に対する市場とならなければならないと述べた。しかし、後進的な都市がその種の取引に自己限定してしまうのは危険である。というのは、そういう取引は、それとは異なるタイプの都市間交易、すなわち自分たちと同じような環境、発展段階の都市との交易を開始するためのスプリングボードにすぎないからである。後進都市は、他の後進都市との交易の比重を大きくしなければならぬのである。さもないと、自分たちが輸入するものと自分たちの生産によって置換できるものとの断絶が大きすぎて、両者を結びつけることができないのである。(p221 ~ 222)

② インプロヴィゼーションと後進諸都市間の相互依存

しかしながら、全体として経済活動が発展していればいるほど、相互に流動的的交易を行なう後進都市にとっては都合がよい。つまり、有利なスタートが切れるのである。東京の自動車部品製造業者は、自分たち自身の発展方式に創意を加えて改良しなければならなかったが、自転車を発明する必要はなかった。……ベネチアの時代から香港の時代にいたるまで、後進都市の発展がスピードアップするパターンが見られるのは、おもにこういった事情によるのである。

もしも経済発展を一語で定義するとすれば、それは「インプロヴィゼーション」ということになるだろう。しかし、実行できないようなインプロヴィゼーションでは意味がないから、より正確に言うなら、発展とは、日常の経済活動の中にインプロヴィゼーションを取り入れることができるような状況のもとで、絶えず創意を加えて改良する過程である。 こういう状況を生み出せるのは相互に流動的な交易を行なっている都市だけであり、それゆえ、後進諸都市はお互いを必要としているのである。(p243 ~ 244)

(6) 地域通貨が国家通貨システムの欠陥をのりこえる

(第11章 都市への誤ったフィードバック)

① かつての都市国家は独自の通貨をもっていた

諸都市が通貨を発明したとき、最初は各都市がそれぞれの通貨をもっていた。 ともかく、これまでわかっている地中海ヨーロッパ、近東、中国、インドなごく初期の都市国家は、自前の通貨をつくり、それらを交易に使っていた。それらの鑄造硬貨には通例、一般に固有の価値を持つとみられていた金属が用いられていた。(p245)

重要な発展を見せていた時代そして場所で、都市国家の通貨が広く普及していたという事実は、現代の世界では、国家の通貨がまだ時期尚早にすぎる地域もあるということを示唆している。(p266)

② 国家通貨の構造的経済的欠陥

現代では、数多くの通貨を排除して少数の、国家あるいは帝国の通貨を優先することが、経済的進歩であり経済活動の安定を促進すると考えられている。しかし、この慣習的な信念は、通貨が経済的フィードバック・コントロールの機能を果たすという点からすると、再検討の必要がある。私がここで問題にしたいのは、国家あるいは帝国の通貨は、都市経済に誤った破壊的フィードバックを与えるということ、また、そのことが深刻な構造的、経済的欠陥へと導き、それらの欠陥のいくつかは、容易に克服できないということである。(p247 ~ 248)

一国の通貨は、フィードバック機能としては有力であるが、適切な修正を引き起こすには無力なのである。それがいったいどういうことかをイメージするために、横隔膜と肺をちゃんと持っている人々が、呼吸中枢としては脳幹を一つだけしか持っていないという場合を考えてみよう。このような奇妙な仕組みでは、呼吸中枢は、集団全体の二酸化炭素の統合されたフィードバック情報を受け取るが、その発生源はどこかはわからない。それゆえ、各人の横隔膜は、同時に収縮するよう指示される。しかしかりに、このうちの何人かは睡眠中で、何人かはテニスをしていたとしよう。また何人かはフィードバック・コントロールを読み取っており、ほかの何人かは木を伐っているとしよう。何人かは自分たちがやっていることを中断して、もっと低水準の活動に切り替えなければならないだろう。さらに具合の悪い場合には、水泳中で水に潜っている人がおり、たとえば、波が押しよせてきたために、潜水時間を調整できなかったとしよう。その人がどうなるかを想像してみよう。このような状況においては、フィードバック・コントロール自体は完璧に機能するだろうが、結果のほうは、システムに内在する欠陥のために破壊的なものとなるだろう。(p253 ~ 254)

不当なせんさくをしないのであれば、アメリカ諸都市は経済原則 — 通貨価値の変動によって生じる原則、すなわち、通貨価値の変動によって提示されるもろもろの機会 — の欠如にひどく悩まされてきたと言ってもよいだろう。もしそれらの機会が存在すれば、都市のつまずきは単に一時的なものに終わることができる。しかし、修正されなければ、つまずきは最終的なものとなり、あとはまっしぐらに下り坂である。失敗は、都市、政府、アメリカ国民の罪ではない。それは領土に付属する構造的な欠陥である。世界政府や世界通貨がまだ夢にすぎないことに、われわれは感謝せねばならない。(p282)

③ 都市と都市地域を経済単位とする通貨によるフィードバック・コントロール

国家は独立した個々の経済単位でないために欠陥を抱えているのである。しかし、われわれは理論上では国家を独立した単位として扱ったり、右に述べたような愚かしい前提に基づいて統計を収集したりするのである。国家に含まれている経済的な混淆物では、とりわけ、様々の都市経済が重要である。それらは、一定の時期にそれぞれ異なる修正を必要としているにもかかわらず、すべてに同じ情報を与える通貨を共有しているのである。それらの都市経済にとっては、そういった統合情報は対外貿易にはまったく役に立たない特殊な情報であり、ましてや国際貿易とは異なるものとしての都市相互間の取引に関しては、まったく情報の体をなさない。にもかかわらず、このお話にならないフィードバックは強力に働いているのである。

通貨のフィードバックは、根底においては、輸出と輸入が均衡しているか否かに関係があるため、そうした情報に適切に対応するメカニズムは、都市と都市地域ということになる。都市は輸入品を自前の生産物で置換できる固有の経済単位であり、かつまた一連の新しい種類の輸出品を創出する固有の単位である。国内の様々な経済の漠然として画一的で統計上のみの集合体が、こういった機能を果たすと思うのは無益なことである。そういうことはまずないのである。

理論上は、ある都市の輸出が順調なときには、その都市は、できるだけ多種多量の輸入品、特に他の諸都市からの輸入品を稼得する必要がある。なぜなら、そのようにして稼得された輸入品は、その都市の輸入置換という重要な過程に不可欠な糧だからである。反対に輸出が不調なときには、理論上は輸入品が割高になるはずである。なぜなら、輸出の仕事が減少して衰退するのを免れるためには、都市はどうしても地元で生産で広範な輸入品を置換する必要がある

からである。また都市は、自らすぐ創出できる新しいタイプの輸出の仕事に対して、刺激を必要としている。言い換えれば、都市は輸出の減少に伴って、自動的な関税、自動的な輸出補助金の働きをする通貨価値の下落を必要とするのである。しかしそれは、必要な期間だけにかぎられる。ひとたび輸出が順調になれば、都市は、できるかぎり多種多様な輸入品を稼得するために通貨価値の上昇を必要とする。事実、個々の都市の通貨は、その対応メカニズムに、適切な修正を引き起こさせ、みごとにフィードバック・コントロールの機能を果すのである。(p254～256)

(7) 帝国はなぜ衰退するのか (第12章 衰退の取引)

成功した帝国主義は富を獲得する。しかし、歴史上はペルシャ、ローマ、ビザンチン、トルコ、スペイン、ポルトガル、フランス、イギリスなど、成功をおさめた諸帝国は、いつまでも豊かではなかった。事実、帝国の運命とは、帝国の費用さえ維持できなくなるほど貧しくなることのようにみえる。帝国が長く続けば続くほど、より貧しく経済的により後進的になる傾向がある。(p284)

一つの帝国を獲得し維持し搾取するのに必要な政策と取引そのものが、帝國的大国の諸都市に対して破壊的な作用を及ぼし、それらの諸都市の停滞と腐敗につながらざるをえない(p284)

これらの政策と取引とは、その動機が何であれ、すべての都市経済を不活性化するものであった。それらは三つの主要なグループに分けられる。すなわち、(1) 長期化した間断のない軍需生産、(2) 長期化した間断のない貧困地域への補助金、(3) 先進 — 後進経済間交易の重点的促進、である。(p285)

① 長期化した間断のない軍需生産

a. 都市経済の稼得を間断なくむさぼる大食漢

間断のない、長期化した軍需生産は、都市経済の稼得を間断なくむさぼる大食漢であり、その度合いが大きいために、歴史上、長期化した間断のない軍国主義は、領土が相当に都市化されないかぎり不可能であった。…… 現在の世界を形成してきたヨーロッパ経済の伝統では、長期化した間断のない軍国主義が可能だったのは、たかだか過去4世紀間にすぎない。(p286)

b. 駐屯への機能は輸入品を置換することではない

都市およびその他の地域の軍事輸出のための仕事は、そのほとんどが都市以外の目的地に送られる財である。それゆえその仕事は、経済活動のいかなる局面においても、輸入置換過程にとってはおのずから不毛で役立たずとなる生産を表している。このことは、軍事的財が戦闘で消費されるときだけではなく、平和時に生産が行なわれて、戦闘で財が消費されないときでさえあてはまる。さらにこのことは、武器についてだけでなく、民間の生産とまったく変わらない財についてもあてはまる。

なぜそうなのかを見るためには、軍事基地や守備隊の駐屯する町の経済に注目すればよい。それらの経済は、輸入はするが、広範な輸入品を地元の生産で置換することはない。…… 輸入品がいかに多様であるか、その量がいかに多いか、あるいはそれらを受け入れる期間がい

かに長いかということは問題にならない。駐屯兵の機能は輸入品を置換することではない。とにかく、駐屯兵が財を手に入れることによって、都市が稼得する輸入品の場合のように、生産の多様性を強めることにはならないのである。(p291 ~ 292)

c. 発展中の経済から退化中への経済へ転化させる手段＝衰退の取引

i. 拡大し発展する経済の特徴

第1に、全体として見れば経済活動の都市化が進み、農村的色彩がより少なくなる。都市の仕事と都市間交易は、絶対的にも相対的にも最大の利益をもたらす。農村の生産と交易も増大するが、しかしそれは、都市活動の副産物としてである。

第2に、都市間交易の拡大につれて、それは主としてそれまで最低生存の地域か供給地域であったような付随的都市に活気を生じさせ、それらを流動的な都市交易のネットワークの中に引き込む。

第3に、生産されるすべての財・サービスの量と種類が増大し、それが都市に輸入されてその地で輸入置換過程に入り込む。これは、先行する二つの変化の結果であり、またそれらの変化が続く条件でもある。(p295)

ii. 衰退し縮小する経済の特徴

第1に、全体として見れば経済活動の都市化が遅れ、農村的色彩が強まる。都市の仕事と都市間交易は全経済活動において相対的に減少し、農村の生産と交易が相対的に増大する。

第2に、既存の都市は停滞・衰退し、その損失を補うには不十分な新しい都市が発生する。

第3に、生産されるすべての財・サービスの量と種類が減少し、それが都市に輸入されるが、輸入置換過程には入り込まない。都市が停滞し、重要な輸入置換をしなくなるにつれ、都市が依然として受け入れている輸入品でさえ輸入置換の役には立たなくなる。これは先行する二つの結果である。(p295 ~ 296)

iii. 衰退の取引

間断のない大規模な軍需生産は、発展中の経済活動の諸特徴が、その対極をなす退化中の経済活動の諸特徴へと直接に転化させる手段でもある。軍需生産にかかわる取引はまさに衰退過程の一部なのである。(p296)

② 長期化した間断のない貧困地域への補助金 ～都市の機能とは何か

国家の軍事支出を建設的でもっと思いやりのある目的にふり向けたらどうか …… 住宅困窮者に家を建て、飢えた人に食物を与え、貧困とその恐れを克服する …… こうした目的をもった福祉計画と、貧困地域の生活水準とサービス水準を、繁栄する都市地域と同じ水準までもっていくための交付金や補助金は、不幸なことに、これまた「衰退の取引」として作用するのである。もしもそれらが間断なく続けば、都市の稼得を間断なく流出させることになる。もしそれらが多少とも豊富であれば、むしろ、軍事計画以上に都市の稼得を食い荒らす。現代の福祉国家が経済の中に登場したのが常設の陸・海軍よりも遅れたのは、おそらくそれも一因であろう。一国内に十分に発達した生産的な都市がなければ、その国には、十分な移転支出その他の福祉計画を実現する余力はない。(p298)

軍事費に対する貢献によって経済的トレード・オフ（※何かを犠牲にして何かを得ること）を受け取る都市があるのと同様に、都市はその補助に対する貢献によって経済的トレード・オフを受け取る。この場合都市が受け取るのは、補助金がなければ買えなかったであろう地域の人々からの消費財の注文であり、また、補助金がなかったら手が届かなかったであろう貧しい地域の病院、学校、大学、上下水道、消防署、農場、電気設備その他の施設からくる、建設と設備用の品目に対する注文である。

表面的には、これはなかなか素晴らしい永久運動機械のようにみえる。補助金取引は、都市からの貢献を引き出し、同時に、都市における輸出の仕事への注文を刺激する。このような取引が無限に続きさえすればよいと思われるだろう。そして、経済活動は無限に進行していくだろう。マルクスが想定したように、それは購買力の有効配分の問題であろう。ディマンド・サイド経済学は、現実には機能するであろう。この永久機械運動では、都市経済の重要性とは、それが富を生むのを得意とすること、とりわけある種の財・サービスの生産に熟達しているということにすぎないだろう。

しかし、都市が経済活動にとって不可欠である理由は、そういうことではない。都市の決定的に重要な機能は、経済活動を発展の軌道にのせ拡大させる起爆剤となることであって、決して永久運動のような単調な働きをすることではない。都市は、二つの形で継続的なエネルギーのインプットを必要とする。すなわち、一つはイノベーションであり、それは根本において人間洞察のインプットである。いま一つは豊富な輸入代替であり、それは根本において、適応性のある模倣を行なう人間能力のインプットである。都市の有用性は、こうしたインプット — 洞察と適応 — を日常の経済活動にうまく取り込めるような関係を提供できる点にある。（p300～301）

③ 先進 — 後進経済間交易の重点的促進

a. 後進都市への負の影響

後進都市に輸出される複雑高度な都市製の財・サービスも、輸入置換に関するかぎりは不毛である。すでに見たように、このような財と後進都市で生産できるものとの断絶はあまりにも大きく、両者を結びつけることができない。だからこそ後進都市は、相互の流動的交易を必要とするのである。（p307）

b. 先進都市への負の影響 ～ 後進都市への借款

この種の発展性のない先進 — 後進交易が、…… 現金で支払われるときには、少なくとも、との取引によって先進都市の稼得の流出とその稼得で買う輸入品の流出は生じない。……
しかし先進 — 後進間交易が、…… 借款で維持されるときは、交易の「先進」側の都市では稼得を流出させているのである。かりに借款が返済される場合でも、さらなる先進 — 後進間交易のためにそれがくり返し更新されるなら、融資している諸都市では、限りなく流出をこうむる。借款がまったく返済できなかつたり、交付金を受けている交易の場合には、それらの取引は補助金と同じように機能する。（p308）

④ 「衰退の取引」は停滞の救済や貧困対策にはならない

現在、衰退の取引に対する余裕がある多くの国、およびその余裕がない多くの国で、不活性

経済にたいする補助金への依存度が強まっている。つまり、先進都市を枯渇させ後進都市を経済的に麻痺させる先進 — 後進間交易、巨額で間断のない軍需生産と兵器取引、さらに農村経済の行き過ぎた非経済的再編成、こういったものに依存する傾向が見られる。われわれは、発展を妨げる罫から抜け出す方途をもっていないように思う。なぜなら、多くの人々、多くの企業、多くの政府、またかつては活気があった多くの都市でさえ、都市を不活性化する政策と取引を通じて捻出された所得に依存するようになってきているからである。

衰退の取引が実施されてきたのは、発展に対して無関心だからではなく、また、政府が貧困や停滞を受け入れているからでもない。反対に、衰退の取引によって意としているのは、発展をもたらす貧困を撲滅することである。このことは、部分的には軍需生産についてさえ言えることである。地域住民や企業は、純粹に経済的な理由から、軍事的な仕事の獲得競争を行ない、軍事的な仕事を拡大するためにロビー活動を行う。悪魔は、手がすいている者のための仕事を見つけるのである。衰退の取引は、見せかけはどうあろうとも、停滞の救済策にはならず、また貧困の原因への対策にもならない。にもかかわらず、衰退の取引はまさに政府がばらまきやすいものであり、帝国への熱望を抱く帝国と国家がばらまかざるをえないものなのである。

(p316)

(8) 不連続、分岐あるいは革命 (第13章 苦境)

不連続という難しい数学上の問題に取り組んでいる数学者たちは、私が右に述べてきたタイプの不連続 (※「発展中の経済から退化中への経済へ転化」) を「分岐」とよぶ。あらゆる分岐に共通するものは、それらが直接の原因に対してではなく、それに先だって増大してきた不安定とストレスに対する反応だということである。それらは「フォーク状に分岐し」、その直前のものとは不連続であり、事態は根本的に変化する。(p324)

① 地域格差の是正 — 中央権力の統一性の維持 — 「衰退の取引」への誘惑

他のどこでもそうだが日本の場合にも、地域格差は不満を引き起こす。そしてなんらかの方法で不平等を問題にし、できるかぎり是正すべきであるという国内の広範な感情をよび起こす。また、他のどこでもそうだが、政府の対応は、周辺地域に大規模に補助金を与えるということだった。こうして、なぜ国が最初に「衰退の取引」に手をつけることが多く、そうした取引がいったん始まるとなぜキリがなくなるかがわかる。それらは、地域的不平等を緩和しはするが、原因を除去することができないのである。(p320 ~ 321)

さらに、衰退の取引に頼らないとしても、それは何の解決にもならない。中央日本にとって、周辺地域の同胞を援助しないこと、北部イタリアにとって南部を援助しないこと、ドイツにとってフランス農民を援助しないこと、カナダ諸都市にとって国内各地の高齢者、病人、失業者を援助しないこと、アメリカにとって武器を生産せず、先進 — 後進間交易を促進せず、またこれまで輸入置換都市を欠いていた地域、都市の衰退に悩んでいる地域を援助しないこと — こうした不作為は、これらの取引によって是正しようとする不平等、失敗、ストレス、不安定を解決しない。(p332 ~ 333)

② 地域通貨 あらたな主権の登場 既存の権力の分割 根底的な不連続

日本の北部及び南部の諸地域がそれぞれ個別の通貨をもっていたならば、それによって関税や輸出補助金に相当するものを自動的に得ることができたであろう（第 11 章で都市のフィードバックについて説明したように）。これらの地域の農業輸出品によって、こうした通貨の価値が極端に歪められるなら — 日本が近代的発展を開始したときの絹の輸出の場合と同様 — 実際に関税が必要ともなろう。しかし、個別的な通貨および関税を賦課する権力 — 当初はそれが必要であるとして — は、ともに新しい主権、すなわち単一の統一主権にとって代わる日本における複数主権を意味するだろう。しかし現実には、単一の統一主権が存在するということは、これらの地域が中央日本に比べていつまでも成長が遅れているのがほぼ確実だということである。（p320）

およそ政治単位たるものは、それを統一させるのをあえて避けることによって、衰退の取引の誘惑に抵抗すべきだろう。それゆえ、根底的な不連続とは、単一の主権をより小さな複数の主権の形に分割することになるだろう。しかもそれは、事態が崩壊と解体の段階に行きついてからではなく、そのはるか手前の、事態がまだ順調に進んでいる間になされなくてはならない。国がこのように行動すれば、分割による主権の複数化によって、経済発展にも、また増大する経済的、社会的活動の複雑さにも無理なく対応できるだろう。（p344）

③ 国家を犠牲にできるか

むしろ問題は、通貨の多様性が主権の多様性を意味すること、あるいは、スコットランド・ポンドがイギリス・ポンドのもう一つの顔であるように、国家の通貨が単なる形式上の通貨になることである。それゆえ、衰退の取引に変わるものとしてのこの種の不連続は、国家としての統一を犠牲にすることになる。それはもろもろの社会、文化、文明、都市が生きることを求めるが、国家を犠牲にすることである。（p336）

国家の神秘性は、人間の犠牲の上に成り立った強力で陰惨な魅力によるものである。国家とその統一性を裏切るとは、血を流したすべての人間を裏切ることになる。…… 国民国家の政府のほとんど — と言ったほうが公正だろう — 大部分の国民は、分断状態のまま繁栄し発展するよりは、国家の統一が維持されるための犠牲たらんとして、むしろ衰退し朽ち果てるほうを選ぶだろう。分離独立主義者でさえ、自分たちの主権を獲得しようとするとき、それがさらに分割されることに激しく抵抗する。（p336 ~ 337）

④ 「パターン国家」の形成は可能か

私の提案の利点は、むしろ、衰退を予防回避する方法として役に立つということにある。さもないと、衰退の取引によって政治単位を統一しようとする国の住民は、確実に衰退と腐朽に見舞われるからである。…… そしてまだ間に合ううちに分割された新しい主権は、自らの力で活力ある都市になるか、あるいは（必要ならば関税の力によって）輸入置換都市や輸出創出都市になる力を具えた集配センターないしその他の有望な原基的都市にならなければならない。（p337 ~ 338）

かりにある国民が、世界の注目と関心をひくに足る大きさを具えた主権を、便宜上分割する実験をしようとするなら、これらのパイオニアたちは、自らの文化と力量について、相当の確

信 — 集権的管理および集権的問題解決を処理できるだけの確信 — をもたねばならないだろう。

このような国民は、その定義からして、政治上の創意に富み、現実的かつオリジナルな方法で自分たち自身の制度を深化させる能力を持たなければならないだろう。かりにそのようなパターンが現れるとすれば、それは、あまりオリジナルでない社会、確信を失った文化にも影響を及すことは疑いない。もしこのパターンが、衰退の取引に変わるものとして成功するなら、それには当然の理由があるのである。(p342)

⑤ 人類の可能性

人類は、遅かれ速かれ、自分の能力の範囲内であらゆることを試みるであろうから、いつの日かどこかで、いずれかの文化や文明で、旧来のものに代わるこのような不連続性の形態が試みられることは疑いないだろう — もしも、行き詰まりの混乱に陥らないうちに巨大な主権を分割することが、人類の能力の範囲内になるならばの話であるが。こういった状況のもとで、われわれは、経済的な死をもたらす現代の苦境を、当面はただ耐えるほかないのである。(p342)

(9) 人間は生来、自在に修正し新しい仕事を付加する能力をもっている

(第14章 漂流)

① 前例のない仕事への「漂流」

私は前に、経済発展とは日常の経済活動の中にインプロヴィゼーションを取り入れることができるような状況のもとで、絶えず創意を加えて改良する過程であると定義した。これを敷衍して、発展とは、インプロヴィゼーションを伴う前例のない仕事への「漂流」であるということができよう。(p344)

② 修正自在な経済活動の秩序 ～ 経済活動に「目的」はあるのか

経済活動は修正自在の「漂流」によって拡大・発展するが、その中にも秩序はある。しかし、その秩序は、軍事的思考（※「確固たる目的」「長期計画」「決然たる意志」によって「目標」に対処しようとする思考）や、トインビーの言う、文明が時代の挑戦に答えられないために滅びるという思想に見られるような「挑戦」と「対応」の秩序ではない。むしろ、そこに存在する秩序は、生物学的進化に似たもので、かりにそこに目的が存在するとしても、われわれにはそれが見えず、目的はわれわれ自身だと考えて満足するほかないようなものである。(p347)

③ 人間を人間たらしめる能力

自然生態環境では、多様性が存在するほど柔軟性も増大する。つまり、生態学者が「ホメオスタシス・フィードバック・ループ」の増大とよぶもの、すなわち、自動修正のためのフィードバック・コントロールの増大が、環境中に含まれることによって、柔軟性が増大するのである。経済についても同様である。私がこれまで論証しようとしてきたように、ホメオスタシス・フィードバック・ループがあまりにも少ないということは、まさに、その国を経済的に著しく不安定化し、諸都市の経済的自己修正能力を貧弱化させるということなのである。

人間以外の動物は、自在に修正しつつ旧来の活動に新しい活動を付加するということがない。しかし、われわれは動物とは異なる。人間にとっては、これまでの仕事の上に、さらに新しい仕事をつけ加えることはごく自然なことである。なぜなら、われわれには生来その能力が具わ

っているのであり、同じことは、自在に修正しつつ言葉を理解し用いることができるという能力の場合にも言える。これまでの仕事に新しい仕事をつけ加え、これまでの技術に新しい技術をつけ加える能力 — 普通の人間はみな、個人としては子供の頃からそうしたことを行っており、集団としては、発展する人間の経済活動の中でそれを行っている — なしには、他の何物かにはなりえても、それは人間とはいえないのである。(p348 ~ 349)

④ 都市は修正自在型の経済である

都市は修正自在型の経済であって、そこでは、経済的創造に対するわれわれの修正自在な能力によって「新しい小さなこと」を確立することができるだけでなく、それらを日常生活のなかに取り入れることができるのである。あいにく、国と都市の間の有害な相互作用のために、経済発展においては一時的な噴出 — 散発的な短期的な「エピソード」があちこちに生じ、その後に停滞と悪化が続く — しかないということになる。このような事態は有害な相互作用そのものを克服する手段をわれわれが見出さないかぎり、なくなるだろう。その意味で、われわれ人間は、修正自在な創造と発展の能力を行使するという点では、まだまだ初期の段階にあるのである。(p349)

以上。